植物や昆虫の愛好家減少で弘大

白神の生き物探求を

社会人対象、新年度にプログラム開始

人材育成のきっかけに

弘前大学農学生命科学部は新年度、社会人を対象に「白神生き物調査マイスター」の育成プログラムを始める。背景にあるのは植物や昆虫の愛好家の減少。広大な自然の生態系の把握・研究には各地域で活動する愛好家の知識や標本といった活動の成果が必要不可欠だが、高齢化が進み「市民科学」の担い手は大きく減っている。白神山地が自然遺産登録30周年を迎えるなど自然を守り伝えることに関心が集まるが「自然の変化に気付かなければ、守るものもそれなくなる」と、同学部附属白神自然環境研究センター長の中村剛之教授は警鐘を鳴らし、本プログラムを自然を探求する人材育成のきっかけとしたい考えだ。（西尾亮）

「自然に関心を持ち自ら調べる人を増やしたい」と語る中村教授

自然史や生態系の研究には、土地の愛好家たちが持つローカルな情報が欠かせず、生き物の変遷などで生態系や環境の変化を問題することに大きく寄与してきた。

こういった愛好家たちの高齢化が進む一方、自然に自ら関わり調べる人は大きく減少。「自然関係のイベントには参加しても、それで終わってしまうケースは多いだろうし、カブトムシやクワガタは好きでもお店で買ってきてしまう・ほかの虫は分からない、という子どもたちも多い。あと一歩踏み込んで自分で調べ探究する人を少しでも増やしたい」と中村教授は語る。

プログラムでは各年度5人を募集し、履修期間は2年間（最長3年）。自然との学術的な接し方や観察会、調査会の企画・運営ノウハウなどを学ぶ内容で、授業科目は▽動物分類学（12時間）▽植物分類学（12時間）▽自然史学概論（22・5時間）▽野生生物調査法（22・5時間）。週に1回程度大学で学生とともに学ぶほか集中講義を行い、野外調査などの体験、標本づくりも行う。同大が開いている市民参加型の生物多様性集中調査イベント「白神バイオブリッツ」にも参加してもらい、こうした観察会のサポートや、自ら発信できる人の育成の足掛かりとしたい考えだ。

新年度履修生は、2月16日まで申請を受け付けている。受講料は3万円。4月上旬に開講式を行う予定。詳しくは同大農学生命科学部ホームページで確認できる。

この画像は，当該ページに限って”陸奥新報”の記事利用を許諾したものです。転載ならびにページへのリンクは固くお断りします。